「戦争について聞いたお話」

私が初めて戦争に付いて耳にしたのは小学校の夏休みでした。おばあちゃんといっしょに、NHKの朝ドラを見ていたら、いつもと違い、祭壇が見えました。「あれなに？」と聞いたら、広島の原爆の慰霊祭だ。」と言って、「それは、それは、おそろしかったよ、西の方が真っ赤に燃えあがり、二週間以上、ずっと昼も夜も、赤かった。」ちょうど光男（母の弟）が生まれて二目だった我家は、四国で瀬戸内海側の一番へこんだ所でした。それから甲子園の試合中にも祭壇が写り、長崎の原爆投下日と終戦日にサイレンがなりました。おばあちゃんは「あと三～四か月終戦が長引いたら、おじいちゃんも兵隊に取られる所だった。」と言いました。おじいちゃんの下の弟は、フィリピンにいて、マラリアにかかり、「帰りたい、帰りたい。」と言いながら亡くなったと終戦から数年たって同じ隊だったという人が、最後の様子を伝えに来てくれました。

大村駅（リフォームしてしまいましたが）竹松駅の階段は出征する人と、親族などが写真を写すため不思議な幅になっています。後に横断幕をたてて写った写真があります。

そして、竹松小学校の正面玄関には航空写真が飾ってありますが、戦前、戦中の物は海の近くがわざとこすられ、何があるかわからないようになっています。ちょうど、自衛隊がある所から下水処理場のあたりと竹松駅から、線路があり、そのまわりに倉庫や官舎があったそうです。

その頃の女学生さんは、そのあたりで飛行機のパーツを油で磨いていたそうです。時々、隊の方へ行く事があったそうですが、久留米大学とかの男子学生さんはベニア板で実寸大の飛行機を作っていたそうです。三機、試作機が出来て、一機はテストフライトで大村湾に落ちたそうで、残っていたのは全部米軍が持っていって、驚いた事にその飛行機は朝鮮戦争で米軍が使っていたそうです。なぜ大学生が大勢いたかと言うと、都市部は空襲にあい食べ物もなく先生たちも兵隊に取られ、勉強にならず「地方の者は地元に帰り、国の役にたつように」と言って帰されたそうです。

帰って来た学生は専門的な事もよく知っているので、いろいろな部所で働いていました。しかし、空襲もあったので、防空壕に入ったり、間に合わなくて、亡くなった方もいます。

今、お弁当屋さんと教会の間に慰霊碑がたっていますが毎年行われていた慰霊祭も何十周年かで、やめてしまいました。でも地元に帰ってこられた方は、幸いでした。大学4年を無理に繰り上げ卒業させて、兵隊に取られ、ろくな訓練もなく、戦地に連れて行かれて、自分より年上の部下を十人くらい連れて地図と少しの食料を持たされて、何日後にここに集まれと放り出された方がいました。中国大陸でそんな目にあった方の奥様の話です。右も左もわからず食料も水もなくなり、さまよっていると、ちょっと大き目の部隊に会ったそうです。その隊長さんがその方の寺の檀家の息子さんで、よろこんで向えてくれて、やっとひと息付き、食事を食べさせてもらい、次の日の朝食と、水を分けてくれて、向う方向を教えてもらって別れたそうです。やっと目的地へたどり付けましたが、帰国後その部隊の人達は別れた次の日に全滅したと聞いたそうです。唯一奥様が聞いた戦争の話です。南洋にいてほとんど現地の人と仲良く過ごしていた人達もいます。ある日、火葬のための木を組むように言われて、用意した所へ一機の飛行機が来ました。大急ぎで火葬をして、骨を集めて箱に入れ、この事は他言無用と言われ、飛行機は飛び立ちました。それから、数日して、米軍がやって来て、武器も、弾もなくあっさりと降伏しました。そして、その火葬が山本五三六さんだったと知ったそうです。訳のわからないまま戦争が終ったとその人は言ってました。

満州の方々も大変でした。その日の朝まで仲良く話していたのに、昼には門をかたく閉ざして引上げの用意です。そんな中、ロシア軍が攻めて来たからと兵隊さんへ予備軍だった人まで連れ出されました。そして、上海まで荷物列車に詰め込まれて、夜は走り昼は息をころしてじっとしていました。そんな中で、臨月だった

方が産気付いてしまいました。昼も夜も冷え込んでいましたので、しかたなく皆の持っているカンテラで少しでも温めようとしましたが、やっと生まれた赤ちゃんは、声もあげる事なく冷たくなりました。そして、夜になって線路の砂利を掘って、せめてもと、なるべく深く埋葬したそうです。でも、それからも少しも進まなくて、その方の子供さんは、お水が欲しいと言うのですが、もう水筒もカラです。一生懸命つばをあつめて口に移しますが、とても足りません。やっと上海に着いて、その方の姉の家に行って水をやっと飲ませられましたが、そこで力ついてしまいました。しかたなく庭に穴を掘って埋めました。お姉さんの家で日本へ帰る船を持ったそうです。

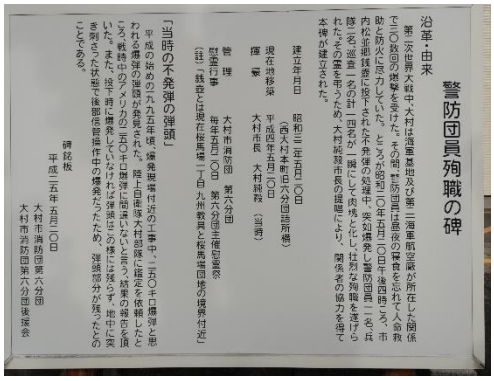
大村市 Ｎさん

＊取材後に大村市古賀島町にある慰霊碑や戦跡を訪れました。
　慰霊碑や戦跡は、その土地で起きた出来事を物語る重要な証しとして各地に残されています。

警防団員殉職の碑

不発弾処理中に爆発し、殉職された警防団員の慰霊碑。

碑の右側にある
当時の不発弾の弾頭



警防団員殉職の碑

沿革・由来

第二次世界大戦中大村は海軍基地及び第二海軍航空隊が所在した関係で三〇数回の爆撃を受けた。その間、警防団員は昼夜の寝食を忘れて人命救助と防火に尽力していた。ところが昭和二〇年五月二〇日午後四時ころ、市内松並郷銭壺に投下された不発弾の処理中、突如爆発し警防団員一名、兵隊二名、巡査一名の計一四名が一瞬にして肉塊と化し、壮烈な殉職を遂げられた。その霊を弔うため、大村純穀市長の提唱により、関係者の協力を得て本碑が建立された。

建立年月日　昭和三二年五月二〇日
（西大村本町旧六分団詰所横）

現在地移築　平成四年五月二〇日
揮　豪　大村市長　大村純穀（当時）

管　理　大村市消防団　第六分団

慰霊行事　毎年五月二〇日　第六分団主催慰霊祭

（註）「銭壺とは現在桜馬場一丁目九州教具と桜馬場団地の境界付近」

「当時の不発弾の弾頭」

平成の始めの一九九五年頃爆発現場付近の工事中、二五〇キロ爆弾と思われる爆弾の弾頭が発見された。陸上自衛隊大村部隊に鑑定を依頼したところ、戦時中のアメリカの二五〇キロ爆弾に間違いないと言う、結果の報告を頂いた。また、投下時に爆発していなければ弾頭はこの様には残らず、地中に突き刺さった状態で後部信管操作中の爆発だったため、弾頭部が残ったとのことである。

碑銘板
平成二五年五月二〇日
大村市消防団第六分団
大村市消防団第六分団後援会

警防団員殉職の碑

沿革・由来

第二次世界大戦中、大村は海軍基地及び第二一海軍航空〇が所在した関係で三〇数回の爆撃を受けた。その間、警防団員は昼夜の寝食を忘れて人命救助と防火に尽力していた。ところが昭和二〇年五月二〇日午後四時ころ、市内松並郷銭壺に投下された不発弾の処理中、突如爆発し警防団員一一名、兵隊二名、巡査一名の計一四名が一瞬にして肉塊と化し、壮烈な殉職を遂げられた。その霊を弔うため、大村純穀市長の提唱により、関係者の協力を得て本碑が建立された。

建立年月日　昭和三二年五月二〇日
（西大村本町旧六分団詰所横）

現在地移築　平成四年五月二〇日
揮　豪　大村市長　大村純穀（当時）

管　理　大村市消防団　第六分団

慰霊行事　毎年五月二〇日　第六分団主催慰霊祭

（註）「銭壺とは現在桜馬場一丁目九州教具と桜馬場団地の境界付近」

「当時の不発弾の弾頭」

平成の始めの一九九五年頃爆発現場付近の工事中、二五〇キロ爆弾と思われる爆弾の弾頭が発見された。陸上自衛隊大村部隊に鑑定を依頼したところ、戦時中のアメリカの二五〇キロ爆弾に間違いないと言う、結果の報告を頂いた。また、投下時に爆発していなければ弾頭はこの様には残らず、地中に突き刺さった状態で後部信管操作中の爆発だったため、弾頭部が残ったとのことである。

碑銘板
平成二五年五月二〇日
大村市消防団第六分団
大村市消防団第六分団後援会